

筑前国分寺

昭和51年度発掘調査概報

筑前国分寺

昭和51年度発掘調査概報
1977・3・31

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷 株式会社 川島弘文社
福岡市中央区舞鶴1丁目5番6号

1977・3・31

福岡県教育委員会

発刊のことば

この概報は、史跡筑前国分寺塔跡の環境整備の基礎資料を得るために、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて実施した発掘調査の概要であります。

発掘調査にあたっては、指導委員の先生方には多くのご助言をいただき、また地元の方々には終始ご協力いただきましたことに対して厚くお礼申し上げます。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森 田 實

例 言

1. 本概報は昭和51年度国庫補助事業として福岡県教育委員会が実施した筑前国分寺塔跡の発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は昭和51年10月1日に開始し、同年11月30日に終了した。九州歴史資料館技師亀井明徳、森田勉が担当し、調査補助員として山本信夫、亀田修一が参加した。
調査の万全を期すために、調査指導委員として、九州芸術工科大学教授沢村仁(建築史)、北九州市立歴史博物館主幹小田富士雄(考古学)の両氏に委嘱した。
3. 掲載の遺構図面は各調査員が作成したものを森田が整理、製図した。写真は遺構、遺物ともに九州歴史資料館技師石丸洋が撮影した。
4. 本書の執筆は、九州歴史資料館技師高橋章がⅢ—2を、その他は森田が行った。
編集は森田が担当した。

目 次

I 位置と環境	1
II 遺構(塔跡)	2
III 出土遺物	4
1 土器	4
2 瓦	6
IV ま と め	8

I 位置と環境

筑前国分寺は福岡県筑紫郡太宰府町大字国分に所在し、大宰府政庁跡の西北の比較的高燥な地に位置している。国分寺推定中軸線と大宰府政庁中軸線との距離は約7町（1町109mとして計算する）強を測る。大野城跡で著名な四王寺山から南へ延びる丘陵の先端近くに位置しているため、周囲の地形は北から南に、また東から西へ傾斜し、西南部がもっとも低くなる。

国分寺の西約200mには推定国分尼寺跡があり、水田中に礎石が点在している。また、東北約200mには日干煉瓦を積み上げ構築した国指定史跡国分瓦葺跡があり、「佐」銘瓦を中心として出土している。

周辺の遺跡には、三角縁神獣鏡を出土した原口古墳（前方後円墳）、方墳を利用しその上に築造した剣塚古墳（前方後円墳）がある。奈良時代の集落としては成屋形遺跡があり、堅穴住居跡を発見している。「遠の朝廷」大宰府が置かれた地であることから古代寺院は多く、さきに述べた国分尼寺跡を初めとし、白鳳時代の塔ノ原廃寺、奈良時代の般若寺跡、杉塚廃寺、天平18年に完成した西海道一の大寺観世音寺、太宰府天満宮で知られる安楽寺、大治元年（1126）銘を有する経筒を出土した武蔵寺を挙げることができる。

大宰府政庁跡からも近く、しかも比較的高所にあり、まさに「好処」に造営したといえる。



1. 国分寺
2. 国分尼寺跡
3. 国分瓦葺跡
4. 大宰府政庁跡
5. 学校院跡
6. 観世音寺
7. 水城跡

第1図 筑前国分寺およびその周辺遺跡 (1/50,000)

II 遺 構 (塔 跡)

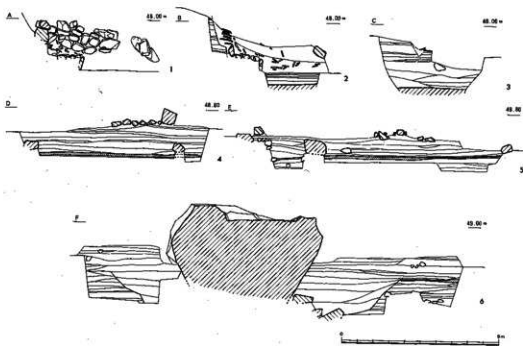
塔跡は推定金堂跡の東南方に近接し、大正11年10月12日に旧内務省により史蹟指定を受け、水田中に保護されていた。今回、環境整備の基礎資料を得るために塔跡全面について調査を実施し、平面規模およびその構造について明らかにした。

塔の平面は30尺四方(1尺30cmとする)で、3間等間隔に10尺づつ割りつけている。

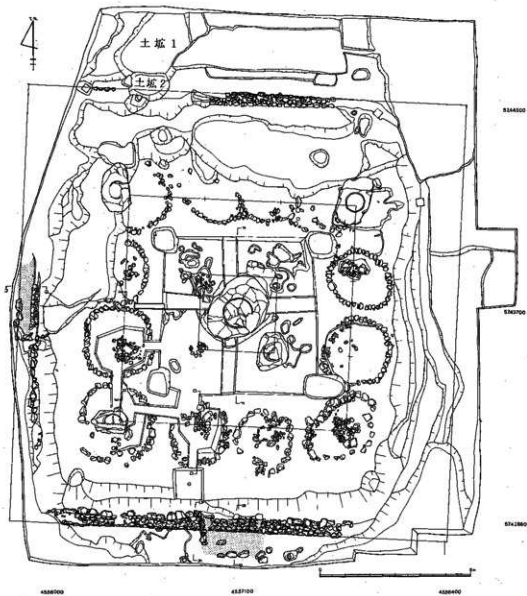
礎石は心礎、東南四天柱礎、東北隅側柱礎が原位置を保っている。他に、西北・西南の隅側柱礎が残存しているが、両者とも箭を入れられ、半分が欠失し、しかも原位置を動かされている。心礎以外の残存礎石には全て円形の柱座が造り出されている。原位置を保ち、完存している東北隅礎石は略長方形(1.25m×2.00m)を呈し、円形の柱座は上面で径約70cmを測る。心礎以外の礎石根石は基壇上に直接置かれ、掘り方はない。

心礎は花崗岩自然石(2.00m×2.75m)で、その中央に径約110cm、深さ約21cmを測る円形の穴を穿ち、柱座としている。

基壇は上成、下成から成る二重基壇で、上成基壇は一边^{55.0}5.5尺、下成基壇は1.5尺を測る。南辺および西辺で検出した上成基壇化粧は30cm~50cm大の花崗岩自然石を積み上げている。この基壇化粧は、土層および出土遺物から創建当初のものではなく、9世紀前半代に階段とともに



第2図 遺構断面図



第3図 遺構実測図 (座標—国土調査法第II座標系)

に造られていることが判明した。下成基壇は30cm～40cm前後の偏平な花崗岩自然石を立て、その上に偏平な花崗岩自然石を敷き詰めている。南・北側のそれは東から西へ勾配を有し、さらに北が高く南は低いことから、東北隅が最も高く、西南隅が最も低くなる。

階段は、基壇南・西辺中央部で発見したが、両者とも道路によってその端を切られ、完掘できなかつた。先述したごとく、検出した階段は上成基壇化粧とともに後に造られたもので、階段埋土中には多数の瓦と少数の土器が含まれていた。南側階段埋土を除くと、下成基壇の石数が現われ、上成基壇では20cm～30cm大の偏平な花崗岩自然石を立て、その上に平瓦を平積みにした化粧を検出した。西側の階段では、下成基壇の石数はなく、また瓦積みはあるが、その下の腰石はない。

基壇の築成方法と西側柱礎石根石調査時に攪乱土中から発見した弧状の石列の性格を知るために、南・北の基壇端部、心礎の四方にトレンチを入れ、心礎・四柱礎の位置を除く周囲の積み土を15cm～30cm掘り下げた。その結果、基壇は北側では、厚さ2cm程の砂質土を敷いた上に、南側では厚さ20cm程の整地層の上に築成されていることが判明した。弧状の石列は環状になり、基壇積み土中に並べられ、側柱礎の位置にのみ配されていた。心礎は、この環状の石列が配された層に掘り込んだ穴の中に据られていた。

塔跡北西部で検出した土壇2の一部は基壇の内側にかかり、その中から多数の瓦および少数の土器を発見した。土壇1からは多数の土器が出土し、また土壇2によって切られているが、出土遺物からみればほぼ同一時期と考えられ、10世紀中葉と推定される。

Ⅲ 出土遺物

塔跡およびその周囲の調査によって発見した遺物は、瓦、須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、輸入陶磁器および近世陶磁器である。

1 土器

土器をまとめて検出した遺構は、南・西側階段中および北西部の基壇を切って掘られた土壇1・2である。ここでは土壇1・2出土の土器について概略報告する。この両土壇から出土した土師器・黒色土器は全て回転ヘラ切り跡があり、また杯の内底にナデあるいはナデ跡と考えられる凹凸のあるものには必ず外底に板状圧痕が観察できる。

土壇1出土の土器（第4図1～21、図版9）

土師器、黒色土器、緑釉陶器が出土した。

土師器（1～19） 杯・椀型土器が出土したが、椀は細片化しているためその全形状は知り得ない。

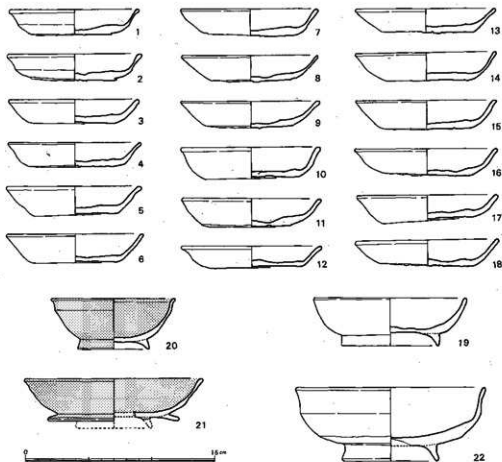
杯A（1～18） 胎土により二種に分けられ、砂粒をほとんど含まず精良なもの（a）、

少量含むもの（b）とがある。a（1・2）は体部と底部との境が明瞭で、段を有し、底部は厚い。また、体部中位に不明瞭ながら稜がつき、口縁部は肥厚し若干反する。法量はbに比して小さく、口径10.5cm、器高2.1cm前後を測る。b（3～18）は体部と底部との境が不明瞭で丸味を有し、成形はaよりも雑である。大部分は口径11.0cm～11.3cm、器高2.0cm～2.3cm内に含まれる。

杯B10数点発見したが、全形が知れるのは図示した19のみである。口径12.2cm、器高3.9cmを測る。

黒色土器 内外を燻した黒色土器を3点検出した。2点は小型の椀で、他は鈿を貼付した高台付杯である。内面のみを燻したものは出土しなかった。3点ともに完器ではないことから、破損した後に、灯火器として使用した杯とともに投棄されたと考えられる。

椀（20）口径9.8cm、器高4.1cmを測る。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。内外のミ



第4図 土城1・2出土土器実測図

ガキは風化のため不明である。

杯 (21) 口径14.0cmを測り、体部と底部との境に幅 0.8cmの鈿を貼付している。杯に鈿を付したものは管見の範囲では初例である。

土蔵2出土の土器 (第4図22、図版9) 土師器のみが出土した。杯、楕型土器があるが、出土点数は少ない。杯は土蔵1出土のそれと同法量である。

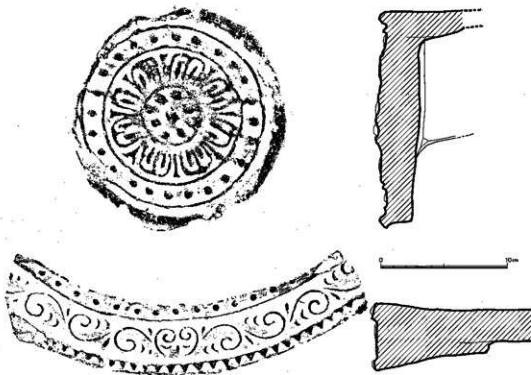
碗 (22) 口径15.0cm、器高 5.9cmを測る。器面は風化が著しく、調整は不明である。

2 瓦

今回の発掘調査により、おびたしい量の瓦が出土した。これらは塔跡全城にわたって出土したものであるが、その大部分は丸・平瓦片で、軒丸瓦45点4種、軒平瓦51点11種と文字瓦、鬼瓦、瓦埴類である。特に西・南階段中および土城から出土した瓦は貴重な資料である。ここでは軒先瓦について若干ふれることにする。

(1) 階段出土の瓦 (第6図1・2・5・6)

階段構築時に使用された瓦、ないし埋土中に含まれていたものである。そのほとんどは鴻

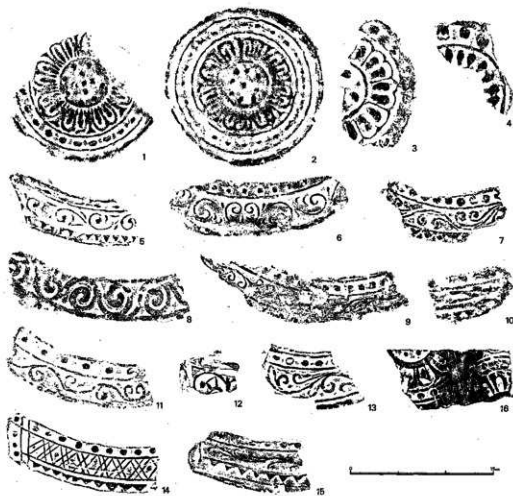


第5図 筑前国分寺軒先瓦組合せ (軒平瓦は筑前国分寺所蔵)

隨館系のもので、1は八弁複弁で中房は1+4+8である。2は八弁で、そのうち1弁が単弁で構成され、中房は1+8の蓮子から成る。この瓦が数点出土しているなかで、瓦当文の単弁を合せると、瓦当と丸瓦との接合が約90度相異している点が認められた。5・6は両方共に中心飾から左右に4回反転する均正唐草文で、6は5に比べ、瓦当幅が広く、中心飾下部は接続しない。又珠文は丸く、凸鋸齒文は小さく密になる。

(2) 土城 2 出土の瓦 (第6図9)

塔跡南側に検出した土城から土師器と共に多量に出土した。9は瓦当左右から中心に5回反転する均正唐草文である。上・下外区共に丸い珠文を配し、顎は段顎で縄目文を叩いている。大宰府政庁跡に類例がある。他に鴻臚館系の瓦が出土した。



第6図 筑前国分寺塔跡出土軒先瓦・平瓦拓影

(3) その他の瓦 (第6図3・4・7~16)

3・4・7~16は暗灰色土ないし表土から発見されたものである。8は南側下成基壇前面から出土した。左から右に流れる偏行唐草文で、唐草の波高が大きく、下外区に大きな珠文を配す。顎は段顎で縄目文の叩きが残る。大宰府政庁西脇殿出土のものに類似している。16は平瓦凸面部に六弁複弁の軒丸瓦の文様を叩いたもので、国分寺でのみ発見される。

今回の調査で出土した瓦のうち、約半数以上が鴻臚館系の瓦である。なかでもきわだっているのが2と6で、全体の約5割を占める。2は1に比べ中房蓮子は9個に減じ、1個の弁が単弁になる。6は5に対し、中心節下部は離れ、蔓草、瓦当幅も大きくなる。顎はや、延びて段は低い。このように1、5に比べ、文様構成ないし技法的に両者共やや退化した傾向が現れている。これらは出土状況においても両者の近似性が認められた。よって数量的、出土状況などから2と6が組み合うものと考えられる(第5図、図版9-1)。さらに1、5に関しては大宰府政庁跡の出土状況から8世紀初頭頃に推定されており、この両者の瓦がそれよりや、新しくなるとするならば、国分寺創建期に接する瓦として考えられよう。

IV まとめ

発掘調査の結果、判明した事実を2、3記し、まとめとする。

1. 基壇は上成・下成からなる二重基壇で、基壇幅は58尺を測る。
2. 礎石柱間は10尺等間隔に割り付けている。
3. 心礎は基壇築成途中穴を穿った後据えている。その穴を穿った同層位上に環状の石列を側柱礎の位置に配している。
4. 検出した階段は、創建当初のものではなく、いずれも9世紀前半代に造られたものである。南側では下成基壇が階段の位置にも連続し、その側面化粧と上成の瓦積みの中の側面化粧の仕方が極めて類似していること、また西側の階段中に下成基壇の化粧がみられないこと、上成基壇化粧に石を使用していないことから、塔創建当初は西階段が付設され、南階段増設時に造り替えられたと考えられる。北も下成基壇が連続していることから創建当初は階段はなかったと考えられる。
5. 終焉は土城出土の遺物から10世紀中葉と考えられる。

☒

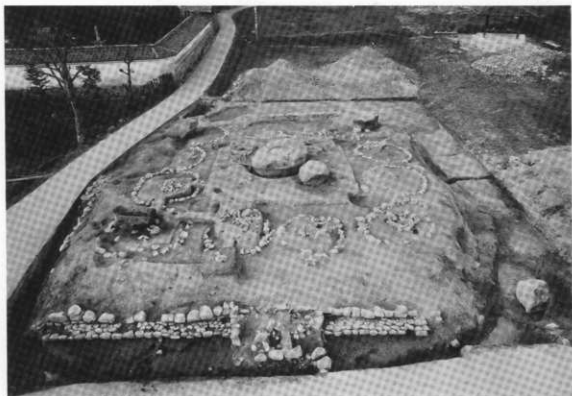
版



1 国分寺周辺空撮（南から）



2 塔跡空撮（南から）



1 全 景 (南から)



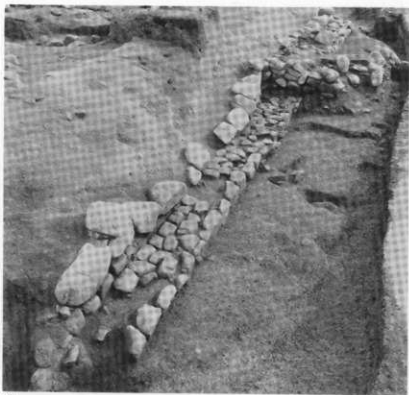
2 全 景 (北から)



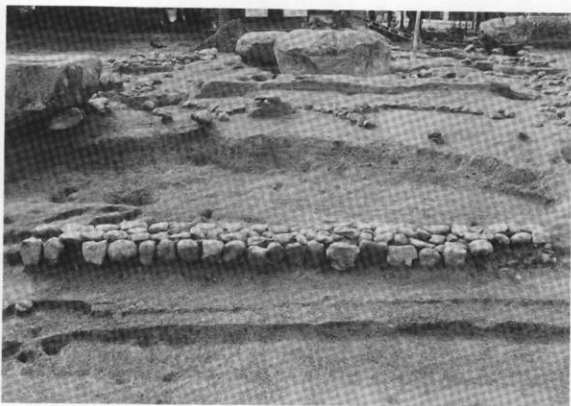
3 全 景 (東から)



4 全 景 (西から)



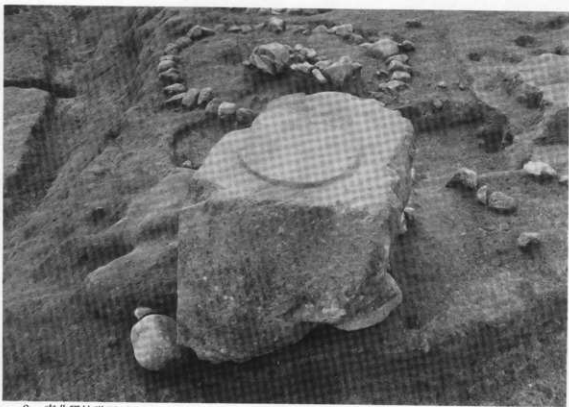
1 南側下成基壇（西から）



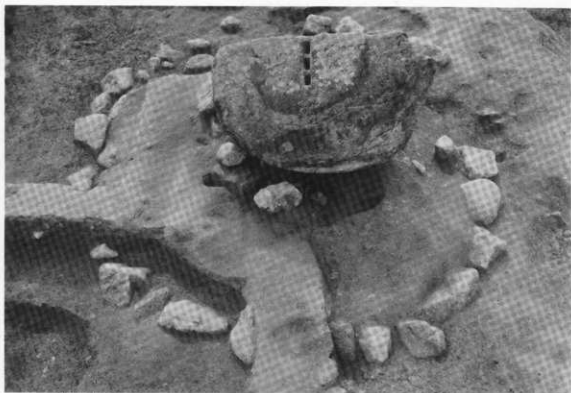
2 北側下成基壇（北から）



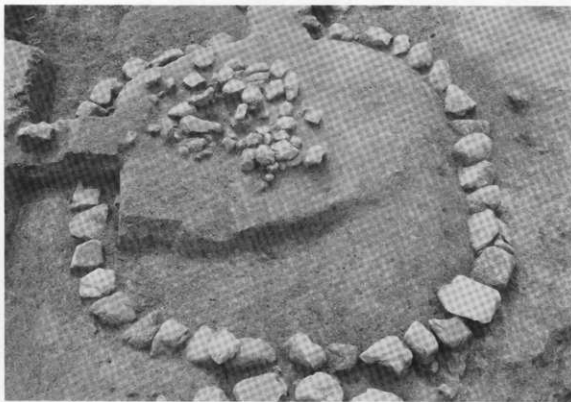
1 心礎・東南四天柱礎石（西から）



2 東北隅柱礎石（北から）



1 西南隅環状の石列



2 西側柱礎石根石・環状の石列



1 南側階段 (南から)



2 同上 埋土除去後 (南から)



1 西側階段 (西から)



2 同 (西南から)



1 筑前国分寺軒先瓦組合せ



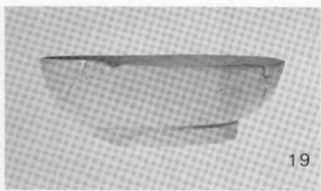
2



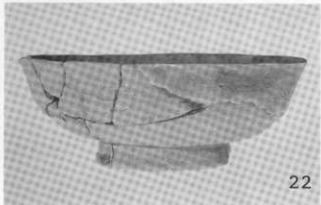
11



17



19



22

2 土城1・2出土土器

筑前国分寺關係年表

延暦20年（801）1月20日	停 _三 大宰府大野山寺行 _二 四天王法 _一 、其四天王像及堂會法物等、並遷 _二 便近寺 _一 、（類聚国史）
大同2年（807）12月1日	大宰府言、於 _二 大野城鼓峯 _一 興 _三 建堂宇 _一 、安 _二 置四天王像 _一 、令 _下 僧四人 _一 如法修業 _上 、而依 _二 制旨 _一 、既從 _二 停止 _一 、其像並法物等、並遷 _二 置筑前国金光明寺 _一 畢、（類聚国史）
延長5年（927）12月26日	筑前国正税。……国分寺料三万二千二百九十三束。……………（延喜式）
長元8年（1035）6月20日	筑前国分寺前二段 _行 轉作（觀世音寺文書）
承暦4年（1080）8月14日	前筑前守章家申国分寺講堂造進事、仰、令新□（水左記）